

1 麦類の栽培について

本年産は、播種後の低温と乾燥が続き生育が遅れていましたが、2月以降にまとまった降雨があったことから生育が平年並みに近づきました。11月17日に二条大麦を播種した圃場では、莖立期は平年より1日ほど遅い3月11日頃でした。

今後の気温は平年並みか高い見込みのため、出穂期は平年並～早まると予想されます。

今後は排水対策や赤かび病防除の基本技術を徹底し、高品質麦の生産に取り組みましょう。

① 排水対策

登熟期の湿害は根の活性を落とし、粒の充実不足を招きます。

- ・圃場の排水溝の溝さらいをしましょう。
- ・まだ設置していない圃場は、周囲に排水溝を掘りましょう。
- ・排水溝は低く掘り下げて、圃場外の排水路につなぎましょう。

② 赤かび病防除

赤かび病は出穂期以降に天候不順が続くと発生の可能性が高くなります。また、比較的暖かい年に多発する傾向があります。不稔粒発生・登熟期連続降雨等は発生を助長する恐れがあります。

赤かび病が発生すると出荷できなくなるので、必ず薬剤散布を行いましょう。

・二条大麦（ビール麦）

防除適期：穂揃い期の7～10日後

ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、1回目の7～10日後に2回目の散布をしましょう。

・小麦

防除適期：1回目⇒開花始め（おおむね出穂期の7日後）、2回目⇒1回目の20日後

ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、3回目の散布を行いましょう。

・はだか麦（ビューファイバー）

防除適期：1回目⇒開花始め（おおむね出穂期の7日後）、2回目⇒1回目の10日後

ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、3回目の散布を行いましょう。

△ 不稔の発生を助長する主な気象条件

- ・出穂期8～10日前の低温（-1℃～-1.5℃に3～4時間遭遇）
- ・出穂期前後の降霜
- ・出穂期前後に25℃以上の高温に遭遇

2 水稻の栽培について

●未消毒種子を購入した場合は種子伝染性病害防除の為、種子消毒を必ず行いましょう。

【種子消毒薬剤の例】

3月16日時点の登録内容です。

農薬名	適用病害虫	希釈倍数	使用方法	使用回数
テクリードC フロアブル	もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病、ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、苗立枯病(リゾープス菌)、苗立枯病(トリコデルマ菌)	200倍	24時間 種子浸漬	1回
スミチオン乳剤	イネシンガレセンチュウ	1,000倍	6～72時間 浸漬	1回

(裏面あり)

【浸種の目安期間】

種子	浸種温度	浸種日数
消毒種子	10~15℃	8~13日(積算温度120~130℃)最初の3日程度は水を交換しない。
未消毒種子		種子消毒を行った後、7~12日(積算温度100~120℃)

●令和3年産は、登熟初期（9月上旬）の日照不足が登熟に影響したため、平年に比べて収量が減少傾向にありました。

必要穂数の確保や異常気象の影響を受けにくくするため、基本技術を徹底しましょう。

●安定栽培のためのポイント

- ・薄播き（1箱乾燥籾150g以下で、均一に播種）
- ・小苗植え（1株当たり平均3~5本で移植）
- ・20~22株/m²（約70株/坪）の栽植密度で移植

●播種量

	播種量(g/箱)	箱数(箱/10a)	育苗日数(日)	葉齢(枚)	草丈(cm)
稚苗	乾籾 130	20~23	20	2.2~2.5	12~13
	催芽籾 170				
半中苗	乾籾 100	24~30	25	3.1	13~15
	催芽籾 130				
中苗	乾籾 100	24~30	30	4.1	15~18
	催芽籾 130				

※箱数（最多）は、1株当たり植付本数が4本、栽植密度が坪当たり70株（m²あたり21株）、安全率120%で計算

※コシヒカリ以外の品種（とちぎの星、あさひの夢）は大粒なので、播種量をとちぎの星で1~2割、あさひの夢で1割増やす。

※葉齢は、鞘葉と不完全葉を除く枚数

【令和3年産に「とちぎの星」の適正栽植密度と植付本数の検討を行いました。】

要約

栽植密度70株/坪・植付本数4本/株移植では、栽植密度60株/坪・植付本数5本/株移植と比較して早期に茎数（強勢茎）が確保でき、m²当たり籾数も多くなることから、普通植栽培に適していると考えられます。

●主な内容

〈展示内容〉 移植日：6月7日

	栽植密度	植付本数
①供試区	70株/坪(21.2株/m ²)	4本/株
②慣行区	60株/坪(18.2株/m ²)	5~5.5本/株

〈生育及び収量調査結果〉 出穂期：8月17日、成熟期：9月28日

	移植後調査					移植後30日調査			出穂期調査	
	草丈(cm)	葉齢(葉)	栽植密度(株/m ²)	植付本数(本)	欠株率(%)	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉色	葉色	SPAD
①供試区	20.9	3.1	22.2	3.9	4.5	51.7	359	4.8	3.5	34.7
②慣行区			18.5	5.1	1.5	51.0	346	4.9	3.1	31.6

	成熟期調査					収量構成要素				収量調査	
	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/m ²)	有効茎歩合(%)	倒伏程度	穂数(本/m ²)	m ² 当たり籾数(粒)	登熟歩合(%)	千粒重(g)	精玄米重(kg/10a)	くず米重(kg/10a)
①供試区	97	20.7	343	95.6	0.6	343	31,744	75.6	24.9	556	6.2
②慣行区	90	20.3	320	92.5	0.8	320	28,603	82.3	24.7	547	3.0

- ・供試区では欠株が多くなるものの、株内の養分と受光の競合が少ないことから、穂数が確保され、m²当たり籾数が多くなった。
- ・登熟歩合については、一穂籾数が多い中で、登熟中期の天候不順の影響を受けた供試区で低くなった。
- ・収量は同程度であり、登熟期の気象が平年並であれば登熟歩合の向上により多収となる可能性を残した。